佛教大学　文学部論集　第102号（2018年３月）

あうん語法 (III)

～世界語エスペラントと〈あうん語法〉との文法比較

村　岡　　潔

〔抄　録〕

本稿では、短縮和語（日本語）の〈あうん語法〉と世界語エスペラント（以下、エスペラント語）の文法比較を行ないます。エスペラント語は、今からちょうど130年前の1887年に、ポーランドの眼科医ザメンホフによって発表された人工言語です。その最大の特徴は、完全に例外のないといわれる16項の文法規則です。このような永い歴史を持ち世界的にも通用していて、利用者も多いエスペラント語の文法に学ぶことで〈あうん語法〉の問題点を検討し、今後、修正可能なところは修正しようというのが本稿の目的です。

前半では、エスペラント語の文法16条の各項目の説明と、その特徴に対して、〈あうん語法〉という日本語の短縮化のための規則（文法）はどのように対応しているかを個々に比較検討します。第 III 節では、エスペラント語が、今日でも、世界共通語としての英語のような自然言語には及ばない理由について検討し、〈あうん語法〉の類似した欠点の有無を吟味します。また、短縮語法ではないエスペラント語に対して、短縮和語である〈あうん語法〉としての利点についても考察します。

キーワード　あうん語法、エスペラント語、世界語、文法、コミュニケーション

I. はじめに～エスペラント語について

本稿では、短縮和語（日本語）の〈あうん語法〉と世界語エスペラント[(1)]（以下、エスペラント語）の文法比較を行ないます。日本エスペラント協会によれば、エスペラント語は、今からちょうど130年前の1887年に、ポーランドの眼科医ラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフ（Lazaro Ludoviko Zamenhof, 1859-1917）によって発表された人工言語で「中立公平で学びやすい国際共通語」です。その目的は、エスペラント語は「民族の言語や文化をその歴史的遺産として尊重し、大切にすると同時に、それぞれの言語や文化の橋渡しの役目を果たすこと」です。現在、英語が事実上の国際語として使われていることは否定できませんが、「英語は特定の民族、

国家の言葉であり、英語でのコミュニケーションは英語を母語とする人々にとっては都合のよいことですが、外国語として勉強する必要のある人間にとっては不都合で、公正ではありません」。ザメンホフが共通語エスペラント語を創案したのは、言葉が異なる民族同士が平等な立場で使える言葉が必要と考えたためでした。エスペラント語は、「ヨーロッパの言語を元にしていますが、発音や文法は規則的になっており、日本人にも学びやすい言語です」。「エスペラント語の誕生によって、外国語学習に伴なう苦労・労力が最小限におさえられるので、世界中の人々が簡単に習得出来、お互いのコミュニケーションが簡単に図れるというものです」（日本エスペラント協会 2017：HP)。[2]

初版のエスペラント語のテキスト『第一書』の学習全書の部は、16か条の文法と、915語の字引きと、６つの短い文例からなっています。ザメンホフは、最初のロシア語版『第一書』を方々の新聞社や雑誌社に送り、やがてポーランド語版、フランス語版、ドイツ語版、英語版などが発刊されていきました。1888年には、第一書に対する各方面からの質問・批評・要求に答えた『第二書』がだされましたが、これは全部エスペラント文で書かれていました。(伊東 1950：87-99)。

今日では、国際語あるいは世界語として十分通用しているエスペラント語の文法16条に対応しているか否かは、和語の短縮用法であるあうん語法の流通可能性に関して、一定の試金石になると言えるでしょう。そこで第 II 節では、エスペラント語とあうん語法の文法を対応させてみましょう。

II. エスペラント語と〈あうん語法〉の文法の比較検討

エスペラント語の最大の特徴は、完全に例外のないといわれる16項の文法規則です。このような130年の歴史を持ち世界的にも通用していて、利用者も多いエスペラント語の文法に学ぶことで〈あうん語法〉の問題点を検討し、修正可能なところは今後、修正しようと考えています。

この節では、エスペラント語の文法16条の各項目の説明を、１条１条行ない、その特徴に対して、そのつど〈あうん語法〉という日本語の短縮化のための規則(文法)はどのように対応しているか、いないかを併記します。ここでのエスペラント語の16か条は、ザメンホフによって書かれたエスペラント語文法の原典のうち英語編から訳出したものです(「エスペラント語の文法」2017：HP)。なお、本文中に国際語とあるのは、エスペラント語のことです。**16条は「B）品詞」についてのことですので、A)文字は別記します。**[3] 以下、**エスペラント語に関しては〔　〕内に、〈あうん語法〉に関しては《　》内に記します。《　》内記述は、(村岡 2016)から抜粋。**なお〔　〕内の「アポストロフィ（’)」は説明のために付けていて、実際では消略します。

〔１不定形はない。定形は、全ての性、数、格に対して、定冠詞 la を使う。〕
《A1:　定型・不定形は区別しません。定冠詞はありません。》

〔2　名詞は語根に o を付加してつくる。複数形は必ず単数形に j を付ける。格は主格と目的格（対格）の二つ。語根に o を付加したものが主格で、目的格は o の後に n を付ける。その他の格には前置詞を使う。つまり、所有格（属格）は de（～の）、与格は al（～に）、助格（奪格）は kun（～とともに、～から、～によって）。その他状況に応じた前置詞を使う。例：語根 patr（父）；la patr’o（その父）；la patr’o’n（その父を）；de la patr’o（その父の）；al la patr’o（その父に）；kun la patr’o（その父とともに）；la patr’o’j（その父たち）；la patr’o’j’n（その父たちを）；por la patr’o’j（その父のために）。〕
《A2: 普通名詞：
　原則２音節以内で表現します。ヤマ、カワなどはそのまま。メールなどで書く際には区別しやすいように名詞はカタカナで書くことがおすすめです。省略法は、早口で話した場合に耳に残りやすい音を中心に音節を再構成します。例えば、「学校」は「ガコ」、「プレゼント」は「プゼ」、「先生」は「セセ」、「宿題」は「シュデ」（シュッデ shukde と読む）となります。また、「金銭」は「キセ」となるが意味をとってより共通性の高い「カネ」にしてもよいです。
　すべての名詞は無変化で主格。「主格＋む/ム」が目的格になります。属格、与格、助格・奪格は、格助詞を使います。それぞれ、「の・に・と」となります。例は、チ［父］、そチ、そチの、そチに、そチと、そチら、そチらム、そチらのため［発音＝＞そチら n た m］》

〔３形容詞は語根に a を付加してつくる。数と格は名詞と同様。比較級は pli（より）を、最上級は plej（もっとも）を前に置く。（～よりも）は ol を使う。例：pli blank’a ol neĝ’o（雪よりも白い）。〕
《A3　　形容詞（または形容動詞）：
　日常的に常用する和語の形容詞では、その原型の最初の１～２音節を採用するか、あるいは、その短縮化された形の最初の１～２文字を採用する。また、場合によっては、英語などの外国語だが、日本でもよく知られている単語の最初の１～２音節を採用する。例えば、
「大きい」－＞「だ」、「小さい」－＞「こ」、「多い」－＞「た」、「少ない」－＞「しょ」、
「広い」－＞「ひ」、「長い」－＞「な」、「短い」－＞「み」、「重い」－＞「おも」、
「軽い」－＞「かる」、「若い（ヤング）」－＞「やぐ」、「年寄の（オールド）」－＞「おど」、
「きれい」－＞「きれ」、「汚い」－＞「きた」、「ハッピー」－＞「は」、「不幸」－＞「フコ」
等々。むろん、他のグループが違う短縮化を行なうこともあり得ます。意思不通の場合、相互に調整し合います。
　次に、名詞を形容する場合ですが、日本語文法と異なり、短めの時は名詞の前に置きますが、

多くの場合、名詞の後に付けます。その場合、前者では、{形容詞＋名詞} の形となり、後者では、{名詞＋形容詞＋さむ(１音節)} の形をとります。例えば、
「若い先生」(６音節)—＞「やぐセセ」あるいは「セセやぐさむ」(５音節)、
「大きい学校」—＞「だガコ」あるいは「ガコださむ」
　と、なります。「さむ」は沖縄語(琉球語)の形容詞の語尾「さん」の変形です。人称代名詞の形容も可能です。例えば、「若い彼と年取った私」—＞「やぐかヱおどあ」。　　》

〔4　基数詞は格によって変化しない。以下：unu(1)，du(2)，tri(3)，kvar(4)，kvin(5)，ses(6)，sep(7)，ok(8)，naŭ(9)，dek(10)，cent(100)，mil(1000)。大きな数は基数詞を単純につなげてつくる。例：583 ＝ kvin'cent ok'dek tri。序数詞は基数に形容詞接尾辞の a を付加してつくる。例：unu'a（１番目の）；du'a（２番目の）等。　倍数詞は基数に obl を付加する。例：tri'obl'a（３倍の)。分数詞は on を付加する。例：du'on'o(1/2)；kvar'on'o(1/4)。集合数は op を付加する。例：kvar'op'e（４つ一組で)。個別的形容詞は po を前に置く。例：po kvin（５つずつ)。副詞としては e を付ける。例：unu'e（１番目に、最初に)。〕
《A4: 基数詞・序数詞などは通常和語のままです。》

〔5　人称代名詞は mi（私）vi（あなた／あなたたち）li（彼）ŝi（彼女）ĝi（それ）si（自分自身）ni（私たち）ili（彼ら／彼女ら／それら）oni（人々)。所有代名詞はそれぞれの人称代名詞に形容詞語尾を付ける。代名詞の格変化は名詞と全く同じである。例：mi（私は)；mi'n（私を)；mi'a（私の)。〕

《A5: **（表１）人称代名詞の一覧表**

人称	単数		複数	
1	あ (A)		あら (Ar) *	
2	ゆ (U)		ゆら (Ur) *	
3	男性	女性	男性	女性
3 人間	か(K)	し(X)	から(Kr)*/ぜ(Z)	しら(Xr)*/ぜ(Z)
3 モノ	そ(S)		そら(Sr)*	

(注*)「ら」は強調するとき以外は、軽く添えて一音節に近くなるように発音します。「あら」は［あぁAr)］のように。この表のローマ字(A,U,K,X など)は、メールなどの書き言葉で主語を明示する際に使用します。X は中国語のように Sh と発音します。主語は、文の中心点を示すため、原則、省略しません。
例：あ（私は)；あむ（私を)；あの（私の）となります。》

〔6　動詞は数と人称による変化はしない。
例：mi far'as（私はする)；la patr'o far'as（その父はする)；ili far'as（彼らはする)。

動詞の形

a）現在形は as で終わる。例：mi far’as（私はする）。

b）過去形は is で終わる。例：mi far’is（私はした）。

c）未来形は os で終わる。例：mi far’os（私はするだろう）。

ch）仮定法は us で終わる。例：ŝi far’us（彼女はするかも／したら）。

d）命令法は u で終わる。例：ni far’u（しよう）。

e）不定法は i で終わる。例：far’i（すること）。

国際語には分詞が２種類ある。可変的・形容詞的なものと、不変的・副詞的なものである。

f）現在分詞能動態は ant で終わる。例：far’ant’a（する～）；far’ant’e（している／しながら）。

g）過去分詞能動態は int で終わる。例：far’int’a（した～）；far’int’e（していた／してしまって）。

gh）未来分詞能動態は ont で終わる。例：far’ont’a（これからする～）；far’ont’e（しようとして）。

h）現在分詞受動態は at で終わる。例：far’at’a（されている）；far’at’e（されていて）。

hh）過去分詞受動態は it で終わる。例：far’it’a（された）；far’it’e（されて）。

i）未来分詞受動態は ot で終わる。例：far’ot’a（これからされる）；far’ot’e（されようとして）。

受動態は全て、動詞 est（～である）の活用形と、必要な動詞の受動態分詞とを併せて用いる。例：Ŝi est’as am’at’a de ĉiu’j（彼女はみんなに愛されている）。〕

《A6:　あうん語法では、文末に「状況詞・情況詞」という助詞をつけて動詞や助動詞の諸問題に対応しています。

次に、代表的な情況詞の一覧表を示します（表２）。

（表２）　主な情況詞の一覧表

情況詞	先行する文に対する意味・役割　［英語の類似語］
たん	・文意が完了していることを示す。・過去の内容であること示す。
らん	・文意を推量していることを示す。［may, might］
みん	・文意が未来のことを示す。［will, going to］
のん	・文意全体を否定することを示す。［not］
かん	・文意が可能であること、あり得ることを示す。［can, could, be able to］
さん	・文意が類似していること（～のようなものだ）を示す。［likely］
ぱん	・文意が必要な（～しなければならない、すべきである）ことを示す。［must, should］
いん	・文意が動作の進行形や状態の継続であることを示す。［～ing］
てん	・文意が受け身に転化することを示す
まん	・文意が敬語であることを示す
ろん	・文意が命令形であることを示す
ぽん	・文意が仮定であることを示す（もし～たら、～場合）

数と人称による動詞の変化はない。
例：「あす」（私はする）；「そチす」（その父はする）；「ぜす」（彼らはする）。
動詞の形：語尾変化はなく、情況詞で識別します。
a）現在形はそのまま。例：「あす」（私はする）。
b）過去形は「たん」で終わる。例：「あすたん」（私はした）。
c）未来形は「みん」で終わる。例：「あすみん」（私はするだろう）。
ch）仮定法は「らん」で終わる。例：「しすらん」（彼女はするかも／したら）。
d）命令法は「ろん」で終わる。例：「〔ある＝私たち〕すろん」（しよう）。
e）不定法はそのまま。例：「す」（すること）。
f）現在分詞能動態は「いん」で終わる。例：「すいん」（している／しながら）。
g）過去分詞能動態は「いんたん」「いたん」*で終わる。例：「すいたん」（していた／してしまって）。
gh）未来分詞能動態は「いんみん」「いみん」*で終わる。例：「い・みん」（これからする〜）。
h）現在分詞受動態は「いんてん」で終わる。例：「すい・てん」（されている）（されていて）。
hh）過去分詞受動態は「てんたん」で終わる。例：「すて・たん」（された）；（されて）。
i）未来分詞受動態は「てんみん」で終わる。例：「すて・みん」（これからされる）；（されようとして）。
　あうん語法では、受動態は全て、「動詞＋てん」で示すことができます。
　例：「しあすてん／みなより」（彼女はみんなに愛されている）。〕
　（注*）また情況詞が続いたときは、文末の「ん」より前の「ん」は消略できます。

〔7　副詞は語根に e を付加してつくる。比較級、最上級は形容詞と同様である。
　　例：mi’a frat’o kant’as pli bon’e ol mi 私の兄／弟は私より上手に歌う）。　〕
《A7:　副詞・副詞句：原則として｛「形容詞（形容動詞）」＋リ｝で表現され、文中では動詞の後に置かれます。但し、時間を表現する句の場合（日時など）は、文頭に置きます。
ちなみに、場所に関しては、｛地名＋む｝で目的語化した形で表現することが可能です。
例：「あのあに／おとたうま／あより」：私の兄／弟は私より上手に歌う）　　》

〔8　前置詞は全て主格支配である。〕
《A8:　前置詞はありません。情況詞・所有格などの「後置詞」を使います。主格支配です。　》

C）一般規則
〔9 全ての語は綴り通りに読まれる。黙字はない。〕
《A9:　すべての語は綴り通りに読まれ、黙字はありません。　　》

〔10　アクセントは後ろから２番目の音節に落ちる。〕（注）この場合、英語と同様の強弱アクセントです。

《A10　アクセントや抑揚は状況次第です。和語には、強弱アクセントは原則ありませんし、中国語の四声のような区別もありません。和語の高低アクセントは、話す地域や文中の位置によっても変化しますので。》

〔11　合成語は語根をそのままつなげてつくる。（主体となる語は最後に立つ。）一語として綴るが、学習時等は（ ’ ）で区切る。文法的な語尾は個々の単語によって考慮する。例：vapor’ŝip’o（蒸気船）は語根 vapor（蒸気）と ŝip（船）と名詞語尾 o の合成である。〕

《A11:　普通名詞の合成語：

合成語や四字熟語などの長い単語は、二文字ずつに分解して短縮化し合成します。例えば「大言壮語」は「タゲソゴ」、「西高東低」は「セコトテ」、「佛教大学」は「ブキョデガ」等比較的変換しやすいです。

原則として、ミクロの範囲での語法なので、最初は齟齬も多いと思われますが、多くの小グループがあうん語法で交流し合う中である方向に定まっていくことが期待されます。また、あうん語法の単語化で意思疎通に妨げが出た場合は、いつでも、本来の和語に戻ることでコミュニケーションは保障されます。

固有名詞の場合、一般には、普通名詞と同様に短縮化します。特に、仲間内の愛称・ニックネームや、ロンドン、ニューヨークなどの有名な地名や、キリスト、ダーウインなど有名人は短縮化されます。これらは例えば、順に、「ロド」「ニュヨ」「キト」「ダイン」などように。　》

〔12　節内に１つでも否定語があれば、２つ目は許されない。〕

《A12:　２重否定はあります。例えば、否定の情況詞「のん」を２回繰り返す、等です。「私は嬉しくないわけではない」は、「あは＋のん＋のん」となり、口語では「あはののん」と発音します。》

〔13　「どこへ？」という質問に答える文章では、単語は目的語の語尾をとる。例：kie’n vi ir’as?（あなたはどこへ行くのですか？），dom’on（家へ）；London’o’n（ロンドンへ）等。〕

《A13:　目的格にはなりません。例：「ゆがどこ［へ］？」（あなたはどこへ行くのですか？），「やへ」（家へ）；「ロドへ」（ロンドンへ）等。

＊助詞の「から」「まで」「より」は同じ使用法です。

＊疑問詞：疑問文は、通常の文末を抑揚を高めることで示します。語順を変えることはありません。書く場合は文末に（？）をつけます。疑問詞は、「だれ」「なに」「どれ」「いくら」「どこ」

「なぜ」はそのままの形で使用します。また、和語と同じように、文中の訊きたい場所に配置します。文頭に置くことはまれです。
＊関係詞：関係代名詞として疑問詞を使うことが可能ですが、あうん語法ではできる限り、重文や複文をさけていますので、ここでは省略します。ただし、「これ、それ、あれ、どれ」の指示語で前述の文全体を指すことは可能です。それらは単純に「こ、そ、ど」と略すこともできます。
＊接続詞：主に、順接（だから、ゆえに、そして…）の「ヱ」、逆接（しかし、けれでも、…）の「ガ」「マ」、及び、並列の「ワ」があります。　》

〔14前置詞はみな、確定した意味を持っている。もし、なんらかの前置詞を使う必要があるが、適当なものがない場合には、確定的な意味を持たない単語 je を使う。例えば、ĝoj'i je tio（それを喜ぶ），rid'i je tio（それを笑う），enu'o je la patr'uj'o（祖国への憧れ）。この様な場合、各言語で違った前置詞が使用されているが、国際語ではただ 1 つの語 je が全てに前置される。意味の混乱のおそれのない時には je の代わりに前置詞なしの目的格を使用してもよい。〕
《A14：「それ」「そ」を用います。》

〔15いわゆる「借用語」、すなわち多くの言語が同じ語源から持ってきている様な単語は、国際語ではその綴字法に準拠する以外は変化を被らない。そしてまた、基本となる語を中心に考え、派生語は基本語から国際語文法に従ってつくられるのがよい。すなわち、teatr'o（劇場）に対して teatr'a（劇場の）等（teatrical'a とはならない）。〕
《A15:　あうん語法では、外来語も、ひらがな・カタカナで表記可能なので心配無用です。》

〔16．冠詞の a と名詞の語末の o は音調をよくするために脱落させてもよい。つまり、de la mond'o を de l' mond'o に、iller'o を iller' の様に。この様な場合、脱落させた母音の代わりにアポストロフィ（'）を使う。〕
《A16:　あうん語法は、ひらがな化、カタカナ化で対応可能です。》
　以上、16箇条について対応させつつ検討してきましたが、あうん語法に特に遜色はないように思われました。

III. エスペラント語の英語にかなわないとされる点

　終わりに、エスペラント語が、今日でも、世界共通語としての英語のような自然言語には及ばない理由について検討し、〈あうん語法〉の類似点を吟味します。また、短縮語法ではないエスペラント語に対して、短縮和語である〈あうん語法〉としての利点についても考察します。

インターネットの「知恵袋」に次のような質問が寄せられていました。(知恵袋 2015：HP)
【Q】エスペラント語はなぜ英語みたいに、世界共通語にならないのですか？
これに対する「ベストアンサーに選ばれた回答」によると、「言語を身に付ける方法は、身に付きやすさの順に並べると、①幼時から家庭や学校などで日常的にその言語を使う。②10歳までにその言語が日常的に使われている環境に入って長期間過ごす。③11歳以降にその言語を長時間かけて学んだり使ったりする。」でしょうが「人工言語の場合、③の方法しか使えないという難点」があり、英語などの外国語に「触れたり使ったりするのに費やす１日あたりの平均時間が、①や②の人の10分の１程度だったりするからです。第２の理由は、日本語と英語の共通点が少ないので、ヨーロッパ人などよりも圧倒的に不利だからです。仮にエスペラントを世界共通語として各国が広めようとした場合、上の第１の理由による日本人の不利はなくなりますが、第２の理由は残ります。エスペラントは、文字も単語も文法も、明らかにヨーロッパ言語に似せて作られており、日本の人が身に付けるのは不利になります。

それに対して、あうん語法では、日本語がベースになっており、第２の理由はまず解消されます。また、第１の理由である「習得のための訓練時間」ですが、日常的にSNSなどで使えるものなのでその懸念も少ないものと思われます。

また、拙稿「あうん語法（II)：迅速和語表現法の工夫について」(村岡 2017：90-92）で示したように、〈あうん語法〉による短縮和語は、比較的マクロな公共的空間ではなくむしろミクロな身の回りやサークルなどで使用されることを推奨している私秘的な用語法なので文脈依存性[4] が高くても対応可能な用法になっていると言えましょう。また、代名詞や動詞などにも日本人が一定程度慣れている英米系言語の語彙も短縮し形式で含まれているし、文法的な要素も似通っている点もあります。こうした点は、現在のSNSの仲間入りの可能性が見えてきていることは否定できません

森本浩一は、デイヴィッドソンについての解説書のなかで、「向かい合っている発話を交換している『ふたり』の間に何が共有されていればコミュニケーションは成立しているのか」という問いに次のようなデイヴィッドソンの答えを引用しています。すなわち「重要なのは…伝達であり、心の中にあるものをだれかほかの人に受け渡すことである。しかもあなたが相手に解釈(理解)されたいと思っているように相手が(理解)するような語を使って、この受け渡しを行うことである。発話にはほかに数多くの目的がある。しかし、この目的が最優先である。真と思っていることを言うとか、他者が発話するであろうと思われるのと同様の仕方で発話するといったことは基本的でも普遍的でもない。[発話によって] 意味していると受け取られたいと思っていることを意味していると受け取られようとする意図、これがあらゆる言語的ふるまいに共通する唯一の目的であることは、私にはあまりに明白であり、誰かがこれを否定することなどとはとうてい思えないのである。」(森本　2004：86－93)

〔注〕

(1)　「エスペラント」の意味ですが、エスペラントは「希望する人」という意味です。エスペラント語では、エスペーロ espero（希望）＋アント anto（〜する人）＝エスペラント esperanto という構成です。

(2)　現在、エスペラント語の使用者は世界各地におり、特に中国、東欧等の共産圏・旧共産圏に多いのも特徴です。また、世界各地にエスペラント組織があり、世界大会等も開催されています。

(3)　エスペラント語には特殊な符号付文字があり、印刷やワープロ等で扱いにくいという問題があります。最近のインターネット上では、エスペラント語では未使用の文字 x を符号の代わりに使うことが多い様です。もし印刷などで符号（ˆ,ˇ）の使用が困難な場合には、（ˆ）には h を代用し、（ˇ）は省略してもよいです。

A）文字

a[a]	b[b]	c[ts]	ĉ[ch]	d[d]	e[e]	f[f]
g[g]	ĝ[dzh]	h[h]	ĥ[x]	i[i]	j[j]	ĵ[zh]
k[k]	l[l]	m[m]	n[n]	o[o]	p[p]	r[r]
s[s]	ŝ[sh]	t[t]	u[u]	ŭ[w]	v[v]	z[z]

(4)　言語の文脈依存性について：言語と社会〈言語使用と社会〉

「ことばによって情報が伝達されるのは、いずれの言語にも共通している特徴だが、そのことばの発せられた文脈状況にも情報は含まれる。ホール（1970）は文化によって言語の文脈依存性が異なることを指摘し、高文脈文化（高コンテクスト文化）と低文脈文化（低コンテクスト文化）があると考えた。日本語は高文脈文化とされる。日本語話者の社会の人間関係が密接で情報が共有化されているため、言語で明確に表現しなくても理解が成立するが、発話を正しく理解するためには、言外の意味を知ることが重要となる。」

（日本語教師のページ：http://www.nihongokyoshi.co.jp/manbow/manbow.php?id＝181&TAB＝2）

〔引用文献：〕

エスペラント語の文法　Esperanta Gramatiko en japana lingvo
http://www.asahi-net.or.jp/~VZ4S-KUBC/gramatiko.html
（アクセス日：2017年10月15日）
伊東三郎　1950：『エスペラントの父　ザメンホフ』岩波新書30
（知恵袋 2017：HP)
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12150185707
（アクセス日：2017年10月15日）
日本エスペラント協会　2017：http://www.jei.or.jp/3pundesiru/（最新更新日：2017年 3 月11日）
（アクセス：2017年10月15日）
宮本正男・白石茂生　1969：『エスペラント文通案内』要文社
村岡　潔　2016：「あうん語法(I)迅速会話のための短縮和語の試み」、佛教大学文学部論集、100号
村岡　潔　2017：「あうん語法（II)：迅速和語表現法の工夫について」、佛教大学文学部論集、101号
森本浩一　2003：『デイヴィドソン　「言語」なんてそんざいするのだろうか？』NHK 出版

（むらおか　きよし　社会福祉学科）

2017年11月15日受理